様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　25　日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：２１６５２０６７
研究課題名（和文）ハンディキャップをもつ人々の積極的社会参加に関する日本の地域文化とその特質
研究課題名（英文）Some Traditional Customs about the Social Participation by Handicapped People in Japan
研究代表者
小口　千明（OGUCHI CHIAKI）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：20169254

研究成果の概要（和文）：ハンディキャップをもつ人々との共生が真に実現するためには、「健常者」とされる人々が「優越的地位」から手を差し延べる「強者・弱者」の関係では不十分である。本研究は、盲僧とよばれる視覚障害者に焦点を当て、盲僧が日本の伝統社会において積極的社会参加を果たし、「弱者」とならずに崇敬の対象となってきた実態を明らかにした。盲僧習俗はとくに九州で発達しており、当該習俗が浸透した要因として、盲僧による琵琶弾奏が指摘できる。

研究成果の概要（英文）：We need to realize the commensal society that handicapped people and the people of “normal condition” are on equal footing. This study focused on the blind priests (Moso) who were revered by people. The custom of the blind priests were recognized in Kyushu District in Japan. The reason why the custom were still existent in Kyushu was related to the performance of Japanese Mandolin (Biwa).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	0	1,000,000
２０１０年度	800,000	0	800,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	180,000	2,580,000

研究分野：複合領域
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学
キーワード：歴史地理学、ハンディキャップ、視覚障害、盲僧、九州、崇敬、琵琶

１．研究開始当初の背景

現代の日本では、福祉という考え方が浸透し、ハンディキャップをもつ人々との共生が進みつつある。これは高く評価すべきことがらであり、将来にわたり、いっそうの推進が期待される命題であろう。

しかし、地理学という学問分野に焦点を当てて考えた場合、地理学では福祉の分野において、さほど顕著な研究上の蓄積を持たないように見受けられる。

日本で 1970 年以降に顕著となる、環境認識論を踏まえた地理学研究の本質は、環境に対する認識主体の多様性を問題提起したものである。多くの場合、地理学では、環境の認識主体として、ごく平均的かつ等質的な人間像を当てはめてきた。このような動向が、ハンディキ

ャップをもつ人々に対する地理学研究の蓄積の少なさとなって表れているとみることができる。ハンディキャップをもっていたり、傷病により日頃のコンディションと異なる状況下にある人々の存在に対して、地理学研究は十分に目を向ける必要がある。本研究申請時におけるこのような問題意識により、本研究の課題設定を行ったものである。

２．研究の目的

ハンディキャップをもつ人々を対象として今日推進されている施策をみると、施策自体は意義深いが、時として、健常者がハンディキャップをもつ人々に対して「優位な立場」から「手を差し延べる」思考が見受けられる場合がある。すなわち、ハンディキャップをもつ人々に対する施策を「やってあげる」という態度であり、これではハンディキャップをもつ人々からの理解は得られないであろう。

この問題を考えるうえで着目されるのが「盲僧」の存在である。盲僧と地域住民との関係をみると、盲僧は、地域住民から一方的に「同情」される立場ではなく、「崇敬を集めている」といえる。また、盲僧の活動は、ハンディキャップをもつ人々の積極的な社会参加の姿といえる可能性がある。

そこで、盲僧が地域住民の暮らしの中でどのように位置づけられているか、その実態を検討することによって、日本の伝統文化の中ではぐくまれた共生思想の地域的特質を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

盲僧習俗に関する先行研究のうち、「共生思想」の地域的特質に関する知見に焦点を当てて、批判的に検討を行う。それとともに、九州を中心として、盲僧習俗の実態について、フィールドワークを行う。とくに、盲僧の日常活動と祭礼等の特殊活動の両面について、地域住民からの「まなざし」に注目しながら実態把握を行う。

さらに、盲僧習俗の歴史的変化を跡づけるため、九州内の寺院に残る僧籍簿等の古文書や盲僧墓誌等の金石文調査を行う。

以上のデータを収集し、比較検討を通して、盲僧習俗という伝統文化における「共生思想」の地域的特質を考察する。

４．研究成果

今日の日本では福祉社会化が進み、それにともなって、地理学・歴史地理学の分野においても福祉が研究対象となりつつある。しかし、例えば「福祉施設の立地」や「同施設の分布」といったテーマ展開は、工場や商店の立地等を研究対象とする定式化された地理学研究のごく単純な応用に過ぎない。そのため、福祉思想の根幹に迫る独自性をもつアプローチとはいえず、もの足りなく不十分な一面がある。

福祉を考えるうえでは、人間へのよりきめ細かい理解が不可欠となるであろう。地理学・歴史地理学では、環境認識論の登場によって、環境に対する認識主体の多様性が問題提起された。これは、環境の認識主体、すなわち、地理学・歴史地理学における人間研究を深化させる好機であった。しかしながら、その後、上記視点は肯定されながらも、具体的研究が十分に進展したとまではいえない。今日なお認識主体に関しては、心身が健常との前提に立つ「等質的人間像」が暗黙の了解となっているのが実情である。筆者はこの点に着目し、ハンディキャップをもつ人々の社会参加が実現している例を、日本の伝統文化の中に見出し、検討を行ったものである。本研究においては、ハンディキャップをもつ人々を「弱者」とみなすのではなく、ハンディキャップをもつ人々が相対的に「優位」として認識される具体例である「盲僧」の習俗について、とくに地域との関わりから注目した。

盲僧の活動として特筆できる鹿児島県日置市の催事「妙音十二楽」では、吹上地域（吹上常楽院旧跡）を中心に、地域住民が盲僧による琵琶弾奏を視聴する。ここには、地域住民による盲僧への崇敬の光景を認めることができる。ただし、妙音十二楽では、琵琶以外に、笛、太鼓、法螺、木魚、手拍子等が加わり、かつてはこれらをもっぱら盲僧が奏した。しかし、今日では盲僧の参加が減少し、晴眼僧がそれを補っている。したがって、今日では盲僧のみではなく、仏僧全般への崇敬という性格が強まっている。ただし、この催事の中心が盲僧琵琶であることは古くから一貫しており、本催事の重要な特質である。

琵琶弾奏において、妙音十二楽が行われる日置市吹上は薩摩琵琶系統の拠点となっており、九州北部の筑前琵琶とは一線を画している。妙音十二楽（於、吹上）の出仕者となり参集する盲僧は、拠点寺院である常楽院（宮崎県都城市）の配下にある。出仕者各盲僧の居所は、2009 年の例では、鹿児島県伊佐市 3 名、日置市 2 名、鹿児島市 1 名、さつま町 1 名、曽於市 1 名、宮崎県都城市 2 名、延

岡市２名、日南市１名であった。すなわち、出仕者となる盲僧の居住域は、すべて鹿児島・宮崎県域内である。妙音十二楽に熊本・大分県以北からの盲僧の参加はみられず、このことと琵琶弾奏の系統には、対応関係が認められる。

常楽院の出仕者となる僧は、現代では晴眼僧がかなり含まれるが、それらの晴眼僧の先代あるいは先々代が盲僧であった。晴眼僧で、在家から出家した僧は、むしろ少ない。これらの状況からみて、現代における常楽院の出仕者圏は、かつて常楽院の統轄下にあった盲僧の分布圏域を示している可能性が大きい。年に 1 回、妙音十二楽法要において出仕者となる盲僧あるいは晴眼僧は、日常的には居住地近辺で宗教活動を行っている。したがって、常楽院における妙音十二楽法要の出仕者圏は単に常楽院と各地に居住する盲僧・晴眼僧との結びつきを示すのではなく、その内部が盲僧や晴眼僧の宗教活動で充填されている領域である。したがって、この領域は先代あるいは先々代の時期における盲僧習俗残存地域であるということができる。

常楽院の薩摩琵琶とは異なる盲僧琵琶としては、福岡県福岡市に位置する成就院が拠点となる、筑前琵琶の流れが存在する。成就院は、現在は 40 か寺を統轄する寺院であるが、かつてはより多くの末寺を統轄する寺院であった。その末寺のすべてが盲僧寺院であったか否かは検討を要するが、盲僧寺院を含めて 544 の末寺が存在したとの伝承をもつ。ただし、この成就院の盲僧との関わりは現代では次第に薄れてきている。成就院配下の寺院においても、盲僧は過去の存在となりつつある。

九州南部は常楽院、九州北部は成就院が拠点となり、盲僧の活動は地域分化されているが、九州東部の盲僧としては、宮崎県北部の高千穂を拠点とした鶏足寺の系統を見落とすことはできない。鶏足寺は今日では廃寺となり、盲僧の活動はみられないが、かつては日向北部や豊後地方などが活動圏域であったとみられる。鶏足寺系盲僧の諸活動について、今後さらに検討する必要がある。

つぎに、日常的宗教活動における盲僧と地域住民の関わりをみていく。常楽院配下の盲僧および盲僧寺院の業務は、寺檀関係にあって弔いや墓所の管理、盂蘭盆の供養などを中心に行う僧侶とは、宗教活動の内容がかなり異なる。盲僧の主たる宗教活動は、没後の供養というよりも、日常的な廻檀と、時期を定めて行う祈祷である。廻檀は、受け持ちとなる集落内の家々を訪ねて浄めを行い、経を唱える。御幣を供える場合もある。

鹿児島県北部に位置するある盲僧寺院を例にすると、盲僧の居住地から約 15 キロメートル圏内を中心に廻檀が行われている。また、2 月には「星祭」、11 月から 12 月にかけては「地神祭」を行う。星祭や地神祭は、生まれ年の星廻りなどをもとにした祈祷である。これら一連の儀式は、仏教というよりも道教の影響が強いとみられる。このほか、随時、祈祷やお祓いを受け付けている。廻檀において琵琶弾奏を行う盲僧もあるが、琵琶をとりやめた盲僧の例もある。時代をさかのぼると、琵琶弾奏が浸透していた可能性が強い。

廻檀の対象となる集落は、鹿児島県北部においてはおおむね中山間地域で、集落は点在している。盲僧による廻檀がさかんに行われた昭和 20 年代後半には、まだ当地域では自家用車の普及は進んでおらず、鉄道やバスなど公共交通機関を乗り継いで廻檀が行われた。盲人用の杖をたよりに、盲僧は一人で精力的に山野を歩き、廻檀を行った。

この廻檀に際し、盲僧の行程が円滑になる仕組みがあった。それは、「泊り宿」の存在である。泊り宿は「宿元」ともよばれ、廻檀中の盲僧がある定まった民家に投宿して、安全かつ効率よく廻檀を継続する仕組みである。盲僧は、泊り宿に対してとくに代金を支払うことはなく、宿泊をはじめ、食事や風呂の提供を受けた。宿泊した盲僧は、泊り宿に対し、返礼の祈祷を行うことが通例であった。宮崎県在住の盲僧の例では、祈祷に際し、琵琶弾奏が伴うことが多かった。

泊り宿は、誰でもが善意あるいはサービスを提供できる仕組みではなく、特定の家がその任にあたるという方法で維持されてきた。集落内でいかなる家が盲僧の泊り宿として選ばれるかはさらなる検討が必要であるが、少なくとも、同情に類する一時的な感情に依拠する仕組みでないことは明らかである。泊り宿の習俗は、四国遍路における善根宿に通じる特徴をもつが、盲僧習俗においては指定される家の固定性が高かった点で、善根宿との差異も認められる。盲僧の廻檀を支える泊り宿の風習は、従来の研究ではあまり注目されてこなかったが、地域文化として根付いている共生の実像として位置づけることができるであろう。

昭和 20 年代から 30 年代にかけて活発に利用されてきた鹿児島県中山間地域の泊り宿は、昭和 40 年代以降になって

利用されなくなっていく。これは、盲僧の家族が自動車運転免許を取得し、自動車による廻檀を開始したことによる。ただし、家族による自動車の導入には個人差があり、宮崎県の盲僧の例では、平成期まで泊り宿が活用されていた。

泊り宿という風習の消滅や残存には、上述のように、盲僧側の事情が関係している。泊り宿の消滅は、宿を提供する地域住民側からの拒絶や放棄ではないことに注意すべきである。盲僧が宿泊したくても、地域住民側がそれを断ったのであれば、地域住民による盲僧への崇敬が失われた証拠となるであろう。現実はその逆であり、盲僧の側から泊り宿を辞退したのであるから、盲僧に対する地域住民の崇敬は維持されていることを読み取るべきである。

かつては盲僧に対する評価が、今日以上に高かったとみられる事象が存在する。盲僧寺院の中には、盲人でなければ寺院の継承ができず、晴眼者では後継の資格が得られなかった事例がある。しかしながら、近年は盲僧の人数が減少している。現に、かつては盲僧によって成立していた妙音十二楽法要は、今日では多くの琵琶弾奏者・楽器演奏者が晴眼僧になっている。盲僧減少の要因としては医療の発達が関係していると考えられるし、盲学校教育の浸透や充実も関係しているものと推量される。したがって、盲僧習俗にみられる共生の思想は、日本の伝統文化の中で生成・維持されてきた地域文化であり、今後さらにスピードをあげてこの文化の実像をとらえる必要が指摘できる。また、盲僧習俗には、盲人を「相対的弱者」とみなさず、崇敬の対象として「相対的優位」に位置付ける仕組みが内包されており、この観点は福祉思想の深化に寄与する可能性をもつと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）

① 小口千明、盲僧と地域文化―ハンディキャップをもつ人々への崇敬―、愛媛の地理、査読有、21 号、2011、51－56

〔学会発表〕（計　1 件）

① 小口千明、盲僧と地域文化―ハンディキャップをもつ人々の積極的社会参加―、歴史地理学会第 229 回例会、2012 年 1 月 28 日、日本大学文理学部（東京都世田谷区）

６．研究組織
(1)研究代表者

小口　千明（OGUCHI CHIAKI）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：20169254